平成 30 年 5 月 14 日（月）

校長室から（NO. ２）

運動会に向けて

水田地帯では、田植えが終わったようで、はられた水面が輝き美しいです。
学校では、運動会に向け、全校で、あるいは、各学年で一生懸命練習を行っているところです。今まさに、高学年の「騎馬戦」の練習を行っているのか、「オッーー！」と雄叫びが聞こえてきます。おそらく、入場の場面でしょう。

考えてみれば、子供たちは、短期期間にいくつもの競技を同時に練習していきます。よく覚えて動けるものだと感心です。また、全体練習では、開会式やラジオ体操等、皆と動きをそろえたり、凛と立つ姿勢が求められたりします。これも、なかなかのがんばりです。本校教員は、「褒めて伸ばす」という指導の鉄則を守り、「いいね。すごい。」「もうできているね。」と、子供たちの認め励ます言葉をかけていました。快い気持ちなりました。

その一方で、私は、言葉の「つかい道」を考えていました。「ゴールは運動会当日。もっと子供の力を引き出す言葉、粘り強く取り組ませる言葉はないものか…」と。

しかし、それはよけいなことかもしれません。なぜなら、先生が褒めてくれることも、運動会はどうあるべきかも、子供たちはすでに経験から知っていること。私たちがかける言葉ではなく、子供自身が自分と対話する時間をほんの数分与えることで、自分はどうしたいのか判断し、自らの行動に生かせることを期待すべきでは、ということを考えたりもしてみました。

答えがあるわけではありません。そう思う中、この言葉を思い出しました。

「やってみせて、言って聞かせて、
やらせてみて、ほめてやらねば人は動かじ。
話し合い、耳を傾け、承認し、
任せてやらねば、人は育たず。
やっている、姿を感謝で見守って、
信頼せねば、人は実らず。」

（山本　五十六）